

与格経験者項から前置詞付経験者項へ

From Dative-Marked Experiencers to Prepositional Experiencers

柳 朋 宏*

1. はじめに

本論文では古英語から中英語にかけて観察された経験者項を含む構文、特に *þyncan* ‘seem’ と *semen* ‘seem’ を含む構文（以下 *seem* 構文と呼ぶ）について、生成文法の枠組みを用いて論じる。古英語においては *þyncan* ‘seem’ が経験者項と共起することがあった。そのような文では、仮に主語が生起する場合は主格で標示され、経験者項は与格で標示された。後期中英語に入ると *semen* ‘seem’ が、古英語の *þyncan* ‘seem’ と同じように与格経験者項と共起する場合もあったが、前置詞付経験者項とも共起し始める。この場合も主語は主格で標示された。

seem 構文における、このような与格経験者項から前置詞付経験者項への変化を説明するため本論では Woolford (2006) の格理論を援用し、次の2点を提案する¹。

- (i) 与格経験者項は語彙要素である V によって語彙的に認可されていた。
- (ii) 対格と与格の区別が消失した後は、経験者項は前置詞 *to* によって構造的に認可されるようになった。

本稿の調査で用いたコーパスは The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE; Taylor et al. 2003) と The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd edition (PPCME2; Kroch and Taylor 2010) である。検索には Beth Randall (2010) の CorpusSearch 2 を用いた。

まず本稿で考察する経験者構文を概観することから始めたい。最初の構文は (1) のような古英語で観察されている与格経験者項を伴う *seem* 構文である。以下の例文中、経験者項を

* 人文学部准教授—英語史的統語論

選択する動詞 *pyncan*/*semen* は斜体字で、経験者項は太字で示す。

(1) 古英語における与格経験者項 (*pyncan* ‘seem, appear’)

- a. *Pis godspel ðincð dysegum mannum* sellic.
‘This gospel will to foolish men seem extraordinary.’ (ÆCHom II 36.1: 271.103)
- b. *Þinceð him* to lytel þæt he lange heold
‘It seems to him too little what he rules long.’ (Beo 1748/OED s.v. †*think*, v.¹ B.2.a)
- c. *ðær him* foldwegas fægere *þuhton*
‘where the paths seemed beautiful to them’ (Beo 866/Denison 1993: 221)

pyncan ‘seem’ は (2) に示すように中英語においても用いられていた。しかしながら、*pyncan* が用いられる一方、古ノルド語からの借入語である *semen* ‘seem’ も使用されるようになる。*The Oxford English Dictionary* によれば、*semen* ‘seem’ の初出例は 1200 年頃である。(2) は *thinken* (< *pyncan*) を含む PPCME2 からの引用である。

(2) 中英語における与格経験者項 (*thinken* ‘seem’)

- a. for **hem** *þincheð* þat godes hese heuieleche semeð. (CMTRINIT, 93.1244)
- b. Hit *þincheð* **hire** let. (CMTRINIT, 183.2524)

pyncan ‘seem’ と同じように *semen* ‘seem’ も与格経験者項を伴うことがあった。これを (3) に例示する。*The Oxford English Dictionary* によれば、このようなタイプの初出例は 1400 年頃である。

(3) 中英語における与格経験者項 (*semen* ‘seem’)

- a. It *semes* **a kynge** to haue discrecioun.
(c 1400 *Secreta Secret., Gov. Lordsh.* xx. 58/OED s.v. *seem*, v.² I.1.a)
- b. The Emparouvr sayde: ‘In tymys **me** *semyth* I may well loue þis mane.
(CMSIEGE, 90.631)

興味深いことに、ほぼ同時期に経験者項が前置詞 *to* を伴って生起する例も観察されるようになる。これが前置詞付経験者構文である。(4) に具体例を示す。

(4) 中英語における前置詞付経験者項 (*semen* ‘seem’)

- a. for it *semes* **to a kynges prorogatyue** to passe oþer
(c 1400 tr. *Secreta Secret., Gov. Lordsh.* xiv. 56/OED s.v. *seem*, v.² I.1.b)

- b. This *seimes to me* ane guidlie companie.

(a1513 Dunbar *Poems* lxxxi. 13/OED s.v. *seem* v.² II.3.b.)

- c. And hit *semep to manye men* þat alle þese sectis synnen þus,

(CMWYCSE, 294.1213)

Elmer (1981) は 14 世紀から 19 世紀にかけて 3 種類の *semen* ‘seem’ 構文が利用可能であったと述べている。その 3 種類の構文を (5) から (7) に示す。

- (5) what *semeth the* to be the resoun of this so wrongful a confusioun

(Chaucer *Bo.* 4.pr.5.26–7)²

- (6) it scholde *seme to som folk* that this were a merveile to seien (Chaucer *Bo.* 4.pr.2.188–9)

- (7) the wikkide men *semen* to be bareyne

(Chaucer *Bo.* 4.pr.2.169)

(5) は虚辞 *it* のない構文, (6) は虚辞を伴う構文である。これら 2 つの *seem* 構文には経験者項 ((5) の *the* ‘thee’ と (6) の *to som folk* ‘to some folk’) が含まれている。一方 (7) は経験者項を含まない *seem* 構文である。

次節では 2 つの歴史コーパス YCOE と PPCME2 から得られたデータを提示する。

2. 与格経験者構文

2.1. 定形動詞に先行する与格経験者項

本節では YCOE を調査した結果について述べる。(1) に挙げたような *þyncan* ‘seem’ と与格経験者項を含む構文はおよそ 200 例であった。与格経験者項が名詞句か代名詞かに関わらず定形動詞に先行する事例も後続する事例も観察された。全ての例のうち、およそ 4 分の 3 に相当する 150 例では与格経験者項は動詞に先行していた。いくつかの例を (8) から (13) に挙げる。

- (8) Nelle we ðas race na leng teon. þy læs þe hit **eow** æþryt *ðince*:

‘We will not longer extend this narrative, lest it may seem tedious to you’

(ÆCHom I 5: 223.183)

- (9) Ða cwæð se ealdorman; Wundor **me** *ðincð* eower ðingræden

‘Then said the general, “Your intercession seems to me a wonder”’

(ÆCHom II 38: 281.49)

- (10) Nu **us** *ðincð* swiðe teart wite þæt an ure fingra on fyr become.
 ‘Now it seems to us a very severe torment if one of our fingers comes into the fire’
 (ÆCHom II 45: 343.272)

(8) は従属節の例であり、主語 hit ‘it’ に与格経験者項が後続している。(9), (10) は話題要素と定形動詞の間に与格経験者項が生起している例である。これら3例では代名詞が用いられているが、名詞句の場合も同様に文頭要素と定形動詞の間に生起する事例が存在する。(11) がその例である。

- (11) Soðlice on ðam micclum dome. **ælcum ænlipium men** *ðincð* to lytel his agen ingehyd him to gewitnysse. þeah ðe he ne sceole oðrum to gewitnysse beon;
 ‘Verily, at the great doom, to each individual man his own understanding will seem to him too little for a witness, though he should not be as a witness to others.’
 (ÆCHom II 44: 332.150)

与格経験者項は(8)-(11)のように節内に生じるだけでなく、文頭要素として用いられる場合もある。(12) は従属節の例、(13) は主節での例である。

- (12) ac bið open sott þeah þe **him** swa ne *ðince*.
 ‘but such an one is an open sot, though it seem not so to himself’ (ÆLS [Pr Moses] 132)
 (13) **Sumum menn** wile *þincan* syllic þis to gehyrenne, forþan þe ylþas ne comon næfre on Engla lande.
 ‘To some men it will seem strange to hear this, because elephants have never come to England.’
 (ÆLS [Maccabees] 564)

2.2. 定形動詞に後続する与格経験者項

前節で示した事例とは対照的に、与格経験者項が動詞に後続する例は少なく、全体の4分の1に相当する52例のみである。いくつかの例を(14)から(18)に示す。(14), (15) は主語名詞句が文頭を占めており、与格経験者項が動詞に後続している例である。

- (14) Þis godspel *ðincð* **dysegum mannum** sellic.
 ‘This gospel will to foolish men seem extraordinary.’ (ÆCHom II 36.1: 271.103)

- (15) Gif we deoplicor ymbe ðis sprecað. þonne wene we þæt hit wile *ðincan ðam ungelæredum* to menigfeald;

‘If we speak more deeply concerning this, then ween we that to the unlearned it will appear too complex.’ (ÆCHom II 45: 339.131)

以下に挙げる (16), (17) も与格経験者項が後続している例である。(16) は代名詞, (17) は名詞句の場合である。古英語では, 主語代名詞は通常話題要素と定形動詞の間に生起するが, *ne* ‘not’ や *þonne* ‘then’ のような演算子要素が文頭に現れる場合には動詞に後続する。代名詞の与格経験者項についても同じことがあてはまり, (9) や (10) のように話題要素と定形動詞の間に生起する一方, (16) や (17) のように演算子要素が生起する場合には定形動詞に後続する。

- (16) Mine gebroðra ne *ðince eow* to hefigtyme. þæt ge ðas godspellican lare gehyron;

‘My brothers, let it not seem too tedious to you that ye have heard this evangelical lore.’

(ÆCHom II 29: 234.138)

- (17) Þonne *ðincð þam arleasum* swylce hi æfre motan libban

‘For it seemeth to the wicked, as if they might live for ever’

(ÆLS [Pr Moses] 300)

与格経験者項が定形動詞に後続している場合の最後の例は (18) である。この例では不定詞 *to gehyrenne* ‘to hear’ を後方照応する *hit* ‘it’ が用いられている。

- (18) Hit *þincð ungelæredum mannum* dyslic to gehyrenne:

‘To unlearned men it seems foolish to hear’

(ÆCHom I 6: 226.84)

2.3. 前置詞付経験者項

本節では前 2 節とは異なり前置詞を伴う経験者項が用いられている例を取り上げる。以下に挙げる文は中英語のコーパス PPCME2 からの引用である。与格経験者項の場合とは異なり前置詞付経験者項は定形動詞に後続する事例のみが観察された。(19) から (22) がその例である。

- (19) Of þe þouȝtes of his herte, to refreyne hem, he was so busy and so curious þat it wolde haue *semed to manye* þat he hadde ipassed mesure. (CMAELR3,32.164)

- (20) for certes, somthyng that somtyme *semeth to yow* that it is good for to do, another tyme it *semeth to yow* the contrarie. (CMCTMELI, 222.C2.208)

- (21) This lange pynnynghe *semede to me* as he hadde bene a seuen nyght dede, allewaye sufferande payne. (CMJULNOR, 53.113)
- (22) And hit *semeþ to manye men* þat alle þese sectis synnen þus (CMWYCSE, 294.1213)

中英語においても1節の(3)で提示したように前置詞を伴わない与格経験者項が用いられていた。中英語における経験者項の分布については、柳（2013）に基づいて次節で概観する。

3. 経験者項の分布

本節では柳（2013）で提示された経験者項の分布を概観した後、古英語・中英語における経験者項の分布の全体像を示す。柳（2013）ではCaxtonの英語の特徴を論じるため、Innsbruck Corpus of Middle English Prose（cf. Markus 2008）に収録されているCaxtonの作品と汎用コーパスとしてPPCME2を用いている。PPCME2とCaxtonの作品におけるsemen ‘seem’と共に用いられる経験者項の分布は表1、表2に示す通りである。

表1. PPCME2における経験者項の分布³

経験者項	統語位置	動詞の後			合計
	統語範疇	(代)名詞	(代)名詞	前置詞句	
m23		0 (0%)	1 (50%)	1 (50%)	2 (100%)
m3, m34		10 (32%)	7 (23%)	14 (45%)	31 (100%)
m4		12 (71%)	3 (18%)	2 (12%)	17 (100%)

(柳 2013 : 8)

表2. Caxtonの作品における経験者項の分布⁴

経験者項	統語位置	動詞の後			合計
	統語範疇	(代)名詞	(代)名詞	前置詞句	
Caxton の作品		95 (73%)	20 (15%)	15 (12%)	130 (100%)

(柳 2013 : 8)

Caxtonの作品は1485年前後の出版であるので、表1ではm4（1420年-1500年）に含まれることになる。表1のm4の各数値と表2の各数値から分かるように、Caxtonの作品における経験者項の分布は当時の文法を反映したものであり、Caxton独自の特徴ではない、と柳（2013）では結論づけられている。

また中英語期において経験者項が動詞に先行する傾向が強くなっているが、これは恐らく動詞に先行する事例のほぼ全てが代名詞であることによるものと思われる。古英語においても当該の構文における代名詞の頻度は高く、YCOE の調査結果によれば、経験者項が動詞に先行する場合は全体の 75.3% が、動詞に後続する場合は全体の 69.2% が代名詞であった。

さらに Elmer (1981) では 1 人称の経験者項は動詞に先行する傾向にあり、2 人称・3 人称は動詞に後続する傾向にあることが論じられている。柳 (2013) の調査結果によれば、PPCME2 においても同様の傾向が観察されている。その結果をまとめたものが表 3 である。

表 3. 時代・人称別による経験者項の生起位置 (PPCME2)

経験者項	統語位置	動詞の後			合計
	統語範疇	(代)名詞	(代)名詞	前置詞句	
m23		0 / 0	0 / 1	0 / 1	0 / 2
m3, m34		6 / 4	2 / 5	4 / 10	12 / 19
m4		4 / 8	1 / 2	0 / 2	5 / 12
m2-m4		10 / 12	3 / 8	4 / 13	17 / 33
合計		22	11	17	50

(表中の数値は 1 人称 / 2 人称・3 人称の数値をそれぞれ表す)

(柳 2013 : 11)

中英語期全体では、動詞の前を占める経験者項 22 例のうち 10 例が 1 人称である。一方動詞に後続する経験者項 28 例のうち前置詞を伴う事例を含めれば 21 例で 2 人称・3 人称が用いられていることが分かる⁵。

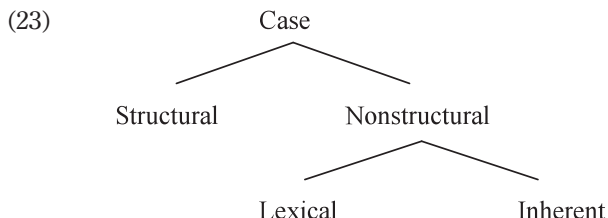
4. 理論的分析

4.1. 3 種類の格 (Woolford 2006)

本節では 2 節で概観した与格経験者項・前置詞付経験者項を含む構文がどのように派生されるのかを生成文法の枠組みで論じる。まず経験者項に付与される「与格」についての仮定を述べる。

一般に生成文法では 2 種類の格「構造格」(structural Case) と「内在格」(inherent Case) が仮定されるが、本稿では Woolford (2006) における格の 3 分法 (23) に従い、「内在格」(Woolford の用語では「非構造格」) を「内在格」と「語彙格」(lexical Case) に下位区分する。これら 2 つの格は意味役割に関連した格であるという点で従来の内在格と同じものであるが、(24),

(25) で示すように認可要素と関連する意味役割が異なるという点で区別される。



(Woolford 2006: 111)

(24) Nonstructural Case licensing

a. Lexical Case is licensed only by lexical heads (e.g., V, P).

b. Inherent Case is licensed only by little/light *v* heads.

(Woolford 2006: 117)

(25) Complementary distribution of lexical and inherent Case

Lexical Case may occur on themes/internal arguments, but not on external arguments, or on (shifted) DP goal arguments.

Inherent Case may occur on external arguments and on (shifted) DP goal arguments, but not on themes/internal arguments.

(Woolford 2006: 115)

「内在格」と「語彙格」の違いは古英語期の二重目的語動詞の内部構造に反映されている。(26) が柳 (2011), Yanagi (2012) で提案されている二重目的語動詞の内部構造である。

(26) [_{NP} DP_{AGENT} *v*_A [_{NP} DP_{GOAL} *v*_G [_{VP} V DP_{THEME}]]]

語彙範疇である V はその補部に主題 (Theme) の意味役割を付与する。古英語では主題項には非構造格ではなく構造格としての対格が上位の機能的語彙範疇である *v*_A によって付与されることになる。一方機能的語彙範疇である *v*_G はその指定部に着点 (Goal) の意味役割を付与すると同時に内在格としての与格を付与する。

4.2. 節構造における経験者項の統語位置

本節では古英語・中英語において経験者項がどの統語位置を占めていたのかを論じる。古英語・中英語における節構造は Van Kemenade (1987), Pintzuk (1999), Fischer et al. (2000) 等で、主要部先行型、主要部後続型、二重基底構造のように異なる提案がなされている。本論では VP 内の構造と機能範疇 T の位置は主たる議論に影響しないので (27) に示すような主要部先行型を便宜上採用する。一般的な V2 語順では、定形動詞 V は T を經由

し C まで移動する。

(27) $[_{CP} XP \ C \ [_{TP} \text{Subject} \ T \ [_{VP} V \ (\text{Object}) \dots]]]$

(27) を考慮すると seem 構文に対する構造は (28) のようになる。þyncan/seem ‘seem’ は下位の VP 主要部から上位の VP 主要部へと繰り上がる。(28) では小節 (Small Clause) を選択しているが, that 節や不定詞節の場合も同様の構造であると仮定する。ただし, SC の部分が CP あるいは TP となる。

(28) $[_{CP} XP \ C \ [_{TP} T \ [_{VP} \text{þyncan/seem} \ [_{VP} \text{Experiencer} \ t_i \ [_{SC} DP \ \text{Predicate}]]]]]$

また経験者項は「主語」ではないため上位の VP 指定部ではなく下位の VP 指定部に基底生成されると仮定する。現代英語のように前置詞を伴う場合も経験者項の基底生成位置は変わらないものとする。(29) は現代英語における seem 構文の構造である。主語 John は小節の主語位置から前置詞付経験者項 to Bill を超えて主節の主語位置に移動している。

(29) John_i seems to Bill [_i to be a genius] (Boeckx 2008: 130)

(29) のような主語の小節からの移動は古英語期にもあてはまる。たとえば (14) の例は (30) のような構造をしているが, 小節の主語 þis godspel ‘this gospel’ は経験者項 dysegum mannum ‘to foolish men’ を超えて主語位置 (さらに文頭位置である [CP, Spec]) まで移動する。

(14) Þis godspel *ðincð* **dysegum mannum** sellic.

‘This gospel will to foolish men seem extraordinary.’ (ÆCHom II 36.1: 271.103)

(30) $[_{CP} \text{Þis godspel}_j \ \delta incð_i \ [_{TP} \ t_j \ t_i \ [_{VP} \text{dysegum mannum} \ t_i \ [_{SC} \ t_j \ \text{sellic}]]]]]$ (cf. (14))

経験者項が代名詞の場合も基本的な派生は (30) と同じであるが, 代名詞の経験者項が動詞に先行する場合は, 代名詞の接語性により定形動詞に接語化していると分析する (cf. Van Kemenade 1987, Pintzuk 1996, 1999)。(9) の例は概略 (31) の構造となる。

(9) Ða cwæð se ealdorman; Wundor **me** *ðincð* eower ðingræden

‘Then said the general, “Your intercession seems to me a wonder”’

(ÆCHom II 38: 281.49)

(31) $[_{CP} \text{Wundor}_j \ \text{me-}\delta incð_i \ [_{TP} \ t_j \ t_i \ [_{SC} \ t_j \ \text{eower ðingræden}]]]]]$ (cf. (9))

経験者項は (13), (14) のように文頭に現れる場合も文中に現れる場合もある。(32) は与格経験者項が文頭に生起している構造で [CP, Spec] を占めている。一方 (33) は文中に経験者項が生起している構造で経験者項自体は移動せず下位の VP 指定部に留まっている。

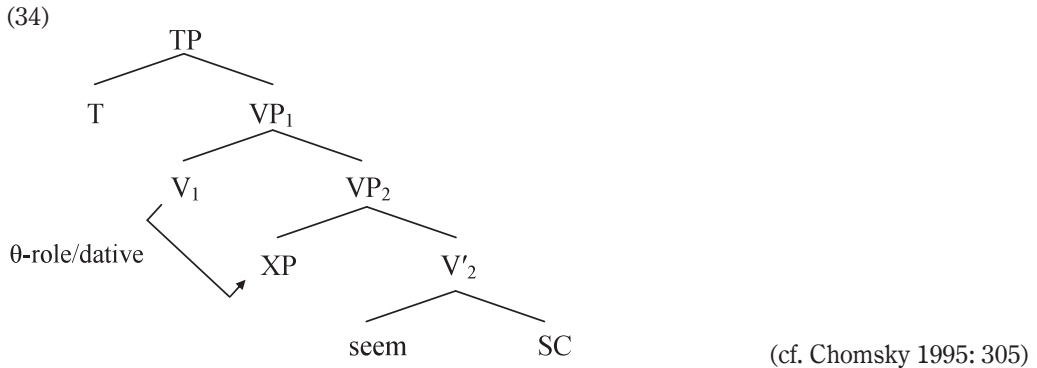
(32) [CP **Sumum menn_j** wile_i [TP *t_j* *t_i* [VP *pyncan* [VP syllic pis to gehyrenne]]] (cf. (13))

(33) [CP Hit_j *pincð_i* [TP *t_j* *t_i* [VP **ungelæredum mannum** *t_i* [SC dyslic to gehyrenne]]] (cf. (14))

次節では経験者項の格による認可過程について論じる。

4.3. 経験者項の格認可

4.2 節で仮定した通り, seem に対しては語彙範疇が2つ重なる VP-shell 構造を採用する。樹形図で示したものが (34) である。これは Chomsky (1995) における seem の VP-shell 構造を援用したものでもある。ただし, Chomsky の構造とは異なり, VP₁ は little *v* ではなく語彙範疇としての V の投射である。



経験者項を含む *pyncan/semn* ‘seem’ の派生は以下ようになる。*pyncan/semn* ‘seem’ の経験者項 XP は語彙範疇 V₂ の投射と併合し VP₂ を形成する。さらに語彙範疇 V₁ が VP₂ と併合し VP₁ を投射する。VP₁ が形成されると語彙範疇である V₁ は VP₂ の指定部に生成される経験者項に意味役割と同時に語彙格としての与格を付与する。

格付与の過程をもう少し具体的に (1a) の例を用いて説明する。2 層の VP が形成された構造が (35) である。この構造形で語彙範疇 V₁ は経験者項である *dysegum mannum* ‘to foolish men’ に「経験者」の意味役割を付与する。それと同時に語彙格としての与格を付与し, 経験者項を認可する。

- (1) a.
- Pis godspel ðincð dysegu mannun sellic.*

‘This gospel will to foolish men seem extraordinary.’ (ÆCHom II 36.1: 271.103)

- (35)
- $[_{VP1} V_1 [_{VP2} \text{dysegu mannun} [_{V2} \text{ðincð} [_{SC} \text{pis godspel sellic}]]]]$

派生はさらに続き、TがVP₁と併合し、ðincð ‘seems’はTまで繰り上がる。その後Tは格を付与されていない名詞要素を探す。最も近い候補は経験者項の *dysegu mannun* ‘foolish men’であるが、この名詞句はすでにV₁から語彙的に格を付与されている。したがって経験者項の名詞句はTの格付与には関与せず、Tはさらに要素を探すことになる。(1a)の例では小節の主語である *pis godspel* ‘this gospel’が次の候補となる。この要素はまだ格を付与されていないのでTによって主格が与えられ認可される。

一方TはEPP素性も持っており、最も近い名詞要素を引き付ける。この場合も最初の候補は *dysegu mannun* ‘foolish men’である。格付与の場合とは異なり、Tとの間に介在要素が存在しないため経験者項がTのEPP素性を満たすために[TP, Spec]に移動する。ここまでの派生を図示したものが(36)である。

- (36) $[_{TP} \text{ðincð-T} [_{VP1} t [_{VP2} \text{dysegu mannun} [_{V2} t [_{SC} \text{pis godspel sellic}]]]]]]$
-

さらに古英語がV2言語であることを考慮すると、定形動詞はCへと繰り上がり、CPの指定部は話題要素で占められることになる。(1a)の場合話題要素は *pis godspel* ‘this gospel’である。(1a)の最終的な構造は(37)のようになる。

- (37) $[_{CP} \text{Pis godspel} \text{ðincð} [_{TP} \text{dysegu mannun } t [_{VP1} t [_{VP2} [_{V2} t [_{SC} \text{sellic}]]]]]]]]$
-

では与格と対格の区別が消失してからはどのような派生が可能となったであろうか。本稿では英語の歴史を通して *þyncan/semen* ‘seem’のVP-shell構造自体に変化はなかったが語彙主要部の機能は変化したと提案する。(22)の統語構造の一部(38)から考えてみよう。

- (22)
- And hit semeþ to manye men þat alle þese sectis synnen þus*
- (CMWYCSE, 294.1213)

- (38)
- $[_{VP1} V_1 [_{VP2} \text{manye men} [_{V2} \text{semeþ} [_{CP} \text{þat alle þese sectis synnen þus}]]]]$

後期中英語以降も *semen* ‘seem’ は「経験者」の意味役割を付与する能力は保持していたが、古英語の V_1 とは異なり、語彙格を付与する能力は消失している。このような変化が生じた要因は与格が名詞要素に具現化されなくなったことである。

「全ての項名詞句は認可のために格を付与されなければならない」という格フィルターに従うと、(38)において経験者項に格が付与されなければ、その文の派生は格フィルターに抵触するため破綻する。そこでこの状況を回避するため前置詞が導入されることになる。その結果、経験者項は前置詞によって構造的に格が付与され、格フィルターを満たすことになる。

- (39) $[_{VP1} V1 [_{VP2} \text{manye men} [_{V2} \text{semeþ} [_{CP} \text{þat alle þese sectis synnen þus }]]]]$

 preposition to

派生はさらに進み、T が VP_1 に併合する。T の持つ EPP 素性により最も近い名詞要素を引き付けることになるが、統語構造にはそのような要素が存在しない。(36) のような例であれば経験者項 *dysegum mannum* ‘to foolish men’ が名詞句なので移動の候補となるが、(22) のような例では経験者項は *to manye men* ‘to many men’ のように前置詞句として現れているので、EPP 素性を満たす要素にはなり得ない。

- (40) $[_{TP} \text{hit semeþ} [_{VP1} t [_{VP2} \text{to manye men} [_{V2} t [_{VP} \text{þat alle þese sectis synnen þus }]]]]]]$ ⁶

また T によって主格が付与される語彙要素もない。この2つの要求「EPP 素性を満たすこと」と「主格が付与されること」を充足させるために虚辞 *hit* ‘it’ が TP の指定部に挿入されるようになる。実際、柳（2013：17）では、動詞の前の位置では経験者項名詞句と虚辞 *it* が相補分布をなしていること、前置詞付経験者項が動詞に後続する場合には虚辞が文頭に挿入される傾向にあることが指摘されている。

5. 結語

本論文では古英語のコーパスである YCOE と中英語のコーパスである PPCME2 から収集した *pyncan/semen* ‘seem’ を含む *seem* 構文を取り上げ、経験者項の格による認可について次の2点を提案した。

- (i) 与格経験者項は語彙要素である V によって語彙的に認可されていた。
- (ii) 対格と与格の区別が消失した後は、経験者項は前置詞 *to* によって構造的に認可され

るようになった。

今後は本稿の分析を拡張し seem 構文と同様に語彙格によって認可されていたと思われる形容詞が選択する経験者項の格による認可方法の変化についても同様の分析が可能であるかを論じる予定である。

本論は 2012 年 8 月 20 日から 25 日にチューリッヒ大学（スイス）で開催された第 17 回国際英語歴史言語学会での発表の一部に加筆修正したものである。本研究の一部は科研費の補助（No. 23520598）を受けて行われた。

注

- 1) 生成文法理論では Chomsky (1981) 以降格付与のメカニズムが理論の変遷とともに提案されているが、共通しているのは「名詞句は格を付与されることで認可される」ことである (cf. Chomsky 1981, 1986, 1993, 1995, 2001)。
- 2) (5)-(7) は Benson (1987) からの引用である。
- 3) 表中における PPCME2 の時代区分は以下の通りである。m2=1250-1350; m23=comp.date 1250-1350, ms. date 1350-1420; m3=1350-1420; m34=comp. date 1350-1420, ms. date 1420-1500; m4=1420-1500
- 4) 前置詞句の経験者項が動詞に先行している例が 1 例あったが、表中の集計では除外している (cf. 柳 2013 : 注 8)。
- 5) 2 人称・3 人称の経験者項に比べ、1 人称の経験者項が動詞に先行する傾向にある理由は、seem タイプの動詞の語彙特性が大きく関わっていると考えられるが、詳細な議論については今後の課題としたい。
- 6) Fischer et al. (2000) によれば 1400 年頃には定形動詞の C への移動は消失しているため、(22) の文の派生は TP までである。

参考文献

- Benson, Larry D. (ed.) (1987) *The Riverside Chaucer*, 3rd edition. Oxford University Press, Oxford.
- Boeckx, Cedric (2008) *Aspects of the Syntax of Agreement*, Routledge, New York.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Clemons, Peter (1997) *Ælfric's Catholic Homilies: The First Series*, EETS SS 17.

- Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, Longman, London.
- Elmer, Willy (1981) *Diachronic Grammar: The History of Old and Middle English Subjectless Constructions*, Niemeyer, Tübingen.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Godden, Malcolm (1979) *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series*, EETS SS 5.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second edition. University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Markus, Manfred (2008) *Manual of the Innsbruck Prose Corpus*. Version 2.3. English Department, University of Innsbruck, Austria.
- Mitchell, Bruce (1985) *Old English Syntax*, 2 vols., Clarendon Press, Oxford.
- Pintzuk, Susan (1996) "Cliticization in Old English," *Approaching Second: Second Position Clitics and Related Phenomena* ed. by Aaron L. Halpern and Arnold M. Zwicky, 375-409, CSLI Publications, Stanford.
- Pintzuk, Susan (1999) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*, Garland, New York.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*. University of York, York.
- Thorpe, Benjamin (1844-46) *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*, 2 vols., Ælfric Society, London.
- Woolford, Ellen (2006) "Lexical Case, Inherent Case, and Argument Structure," *Linguistic Inquiry* 37, 111-130.
- 柳朋宏 (2011) 「英語史における名詞句と格認可の変化について」 *JELS* 28, 176-182.
- Yanagi, Tomohiro (2012) "Ditransitive Alternation and Theme Passivization in Old English," in *Outposts of Historical Corpus Linguistics: From the Helsinki Corpus to a Proliferation of Resources* (Studies in Variation, Contacts and Change in English 10), ed. by Jukka Tyrkkö, Matti Kilpiö, Terttu Nevalainen and Matti Rissanen, Research Unit for Variation, Contacts, and Change in English, Helsinki. <http://www.helsinki.fi/varieng/journal/volumes/10/yanagi/>
- 柳朋宏 (2013) 「後期中英語における *semen* の統語特性について—William Caxton の作品を中心に—」 谷明信・尾崎久男編『15世紀の英語—文法からテキストへ—』1-20, 大阪洋書, 大阪.

(2015 年 4 月 20 日 受理)